

特集 古墳時代の交通と流通
Transportation and distribution in the Kofun period

総論 古墳時代の輸送手段にみる交流の諸相

General remarks
Various aspects of exchange in transportation methods in the Kofun period

船による交通・流通

Ship transportation and distribution in the Kofun period

考古学ジャーナル No.731 p.20~p.24 2019.10

ひだか しん
日高 慎

東京学芸大学文化財科学分野

Shin Hidaka

Dep. of Cultural Properties Science, Tokyo Gakugei University

考古学ジャーナル (p.3~p.4)

2019年10月号 (通巻No.731)

ニューサイエンス社

総論 古墳時代の輸送手段にみる交流の諸相



Profile
 1991年 同志社大学文学部卒業
 '98年 筑波大学大学院博士課程満期退学
 2004年 東京国立博物館研究員
 '11年 より現職
 '13年 博士(歴史学)

General remarks
 Various aspects of exchange in transportation methods
 in the Kofun period

ひだか しん
 日高 慎 (東京学芸大学文化財科学分野)

Shin Hidaka ● Dep. of Cultural Properties Science
 Tokyo Gakugei University

はじめに

古代社会において、必要な情報をいかにして得るのかということは、極めて重要な課題であった。前近代においては、その情報を得ていなければ生きていけないといったこともあっただろう。

奈良時代以降、官道という直線道路を列島に張り巡らすことで、情報(人びと)の行き来は格段に進んだはずである。古墳時代に、律令国家が敷設したような官道は存在しないが、さまざまな情報が日本列島の北から南、東から西と行き来していたことは間違いない。

本特集では、古墳時代の交流・移動・輸送などを担う手段として、道(徒歩)・修羅・馬・船をとりあげて、その実際についてさまざまな物質資料をもとに議論をおこなっている。本稿では、その前提となる基本的な論点を述べていきたい。

1. 徒歩による交流の在り方

古墳時代を問わず、人間の最も基本的な移動手段は徒歩である。乗馬という画期的な移動手段が日本列島に導入される以前においては、陸上交通の最も主要な方法であっただろう。旧石器時代から弥生時代にかけての黒曜石の利用は、船でなければ手に入れない神津島産のものもあるが、それぞれの地域に産する黒曜石を徒歩で運んでいたことを示している¹⁾。

古墳時代前期の日本列島は、畿内あるいは東海地域に端を発する土師器が、さまざまな地域へと波及していく。西川修一は、神奈川地域の弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡分布と交通路が、古代律令国家の官道ルートと合致するとした²⁾。この時期馬や車輪はなかったので、陸上を通るルートとしては徒歩によるしかなかったはずである。火山灰下の群馬県渋川市黒井峯遺跡では、人びとが通った道が発見されている。徒歩による交流の様は、土器の地域性や外来系土器波及の在り方によって理解できる。

2. 修羅による輸送方法

1978年大阪府藤井寺市三ツ塚(八島塚古墳と中山塚古墳の間)の周溝から大型と小型の修羅、テコ棒が出土した。1999年に開催された大阪府立近つ飛鳥博物館の修羅の特別展図録で³⁾、出土した状況や類例、他の輸送具などを詳細に知ることができる。概ね5世紀代の所産と考えられるが、14~15世紀とされる京都市北区鹿苑寺庭園でも同様の修羅が出土しているから、同様の装置は長く使われていたのであろう。6世紀の大阪府東大阪市瓜生堂遺跡出土の須恵器には、馬に曳かせている轡の線刻画がある。

2019年には、千葉県木更津市松面古墳の周溝から出土していた木製品が、修羅の破片であったことも判明した。松面古墳は墳丘長一辺44mの二重周溝をもつ7世紀初頭頃の大規模な方墳であり、石室を構成する石材を運んだものと思われる。古墳時代前期の竪穴式石室の天井石を始めとして、重量物を陸上で輸送するために、同様の修羅は各地で使われていたのだろう。

3. 馬による移動手段と輸送

日本列島における乗馬は、おおむね古墳時代中期、すなわち5世紀代に全国各地へ伝わったが、それは馬の飼育という難題も突きつけられたはずである。日本列島における馬の波及は、馬の墓などの馬そのものの資料とともに、馬具の出土や牧がそれを跡づける資料となる。桃崎祐輔は、馬具出土古墳が集中する長野・静岡・群馬は『延喜式』記載の古代牧比定地の分布と重なっており、馬産地を背景に潤沢な馬匹供給があったと理解した⁴⁾。

1992年に刊行された『図解・日本の人類遺跡』での馬具の伝播と普及の図では、5世紀末には関東から北陸以西、7世紀には東北中部以南とされているが⁵⁾、桃崎によれば5世紀前半には東北南部以南、

5世紀後半には東北中部以南、7世紀中葉には東北北部以南と、東方あるいは北方への普及は大幅に早まっていることが知られる⁶⁾。

人間も同様だが、馬の飼育にあたっては塩が必要不可欠である。河内の牧として注目されている大阪府四条畷市葦屋北遺跡では、馬飼育の痕跡と製塩土器が多く出土している⁷⁾。古墳時代ではないが、山梨県山梨市中島遺跡では、遺構には伴っていないものの、底に「馬」という字が線刻されている8世紀後半の土師器坏と製塩土器とが、包含層から出土している⁸⁾。内陸地域での塩の確保は、時代を問わず重要な研究課題である。

4世紀末頃に日本列島へともたらされた馬は、それまでの陸上での移動・輸送手段を一変させたはずである。5世紀後半には多くの地域で馬が生産されつつあったのであり、5世紀末頃から6世紀代には群馬県における火山灰下の遺跡から、夥しい馬の足跡・牧・馬骨も見つかっている。

4. 船による交通・流通

古墳時代の船は、いわゆる準構造船と呼ばれるものである。縄文時代には丸木舟の出土が各地で認められるが、弥生時代以降に準構造船へと変化し、複雑化・大型化していく⁹⁾。埴輪の船や線刻画などに見られる船は準構造船としてよいものである¹⁰⁾。日本列島における構造船の出現がいつだったか、未だ明確ではない。遣唐使船は中国との交流のなかで当時の最新式の船が造られたはずであり、おそらく構造船であっただろう。

小型船には帆があった可能性が高いが、古墳時代の大型船に帆があったのかどうか、現状ではなかったとしかいえない¹¹⁾。しかし、埴輪の船にみるように外洋を航行する大型船があったことは間違いない。沿岸地域や河川の流域に特徴的な資料が出土することも、かつて述べた通りである¹²⁾。古墳時代を通じて、大量の人や物品を運ぶことのできる手段は船であっただろう。

5. 車輪の出現はいつか

世界史的に見て、車輪の出現は古代メソポタミアのウルク後期(紀元前3000年頃)に遡り、東アジアでは、中国で確実に殷代後期(紀元前1300年頃)

の車馬坑で確認できる¹³⁾。日本列島は、文献史料からみると物資運搬用の車で奈良時代から、乗用の車では平安時代になってからとされる¹⁴⁾。出土品で見ると、藤原宮跡や奈良県桜井市小立古墳出土の出土品などは、7世紀後半代と考えられる¹⁵⁾。

古墳時代には、三角縁神獸鏡等に車馬が鋳出されたものがある。これらの図像を当時の人びとがどれほど理解していたのかは未詳だが、実物ということでは日本列島にはまだなかっただろう。飛鳥時代あるいは奈良時代を待たなくてはならない。

おわりに

古墳時代には、上記のような輸送手段が存在した。本特集において、各執筆者には具体的な姿を述べていただいた。もちろん、モノを運ぶのであれば、頭に載せたり、箱に入れたり、背負うということもあった。そのような道具類(木器等)についても当然ながら議論する必要があるが、これは他日を期したい。

文献

- 1) 日本考古学協会 2011 年度栃木大会実行委員会 2011『2011 年度栃木大会研究発表資料集』
- 2) 西川修一 1991『弥生の路・古墳の路』『古代』92 pp.263-289
- 3) 大阪府立近つ飛鳥博物館 1999『修羅! その大いなる遺産 古墳・飛鳥を運ぶ』
- 4) 桃崎祐輔 2009「牧の考古学-古墳時代牧と牛馬飼育集団の集落・墓-」『日韓集落研究の新たな視角を求めて』pp.161-235 韓日聚落研究会
- 5) 松木武彦・新納泉 1992「武器と武具」『図解・日本の人類遺跡』pp.172-175 東京大学出版会
- 6) 桃崎前掲註4) p.207
- 7) 藤田道子 2010「葦屋北遺跡出土の製塩土器の一考察」『日本古代の王権と社会』pp.85-101 塙書房
- 8) 笠原みゆき 2019「中島遺跡・下河原遺跡」山梨県教育委員会
- 9) 清水潤三 1975「日本古代の船」『船』pp.11-83 社会思想社
- 10) 一瀬和夫 2008「古墳時代における木造船の諸類型」『古代学研究』180 pp.215-223
深澤芳樹ほか 2013「原始・古代の船I」立命館大学考古学論集刊行会
- 11) 日高慎 2018「古墳時代の大型船に帆はあったのか」『実証の考古学』pp.275-288 同志社大学考古学研究室
- 12) 日高慎 2002「水界民と港を統括する首長」『専修考古学』9 pp.31-45
- 13) 末崎真澄ほか 1996「馬と人間の歴史 考古美術に見る」馬事文化財団
長谷川敦章 2006「伝чыог・ザンビル出土の青銅製輪縁及び轂カヴァーについて」『西アジア考古学』7 pp.55-60
- 14) 加藤友康 1993「『くるま』の比較史」『アジアのなかの日本史VI 文化と技術』pp.91-112 東京大学出版会
- 15) 加藤友康 2004「日本古代における交通・輸送と車」『古代交通研究』13 pp.55-66
橋本輝彦 2004「奈良県桜井市・小立古墳出土の車輪について」『古代交通研究』13 pp.91-100